

# 移民、友人Sのこと（上）



ブルネイにいたころの友人Sの家。白亜の殿堂であった。メイドさんの安全のため昼間は外から施錠されていた。

仕事で知り合った外国の友人も年を経るに従って減ってきたが、その中で二十五年も関係が途絶えずに続いている友人Sがいる。今年の夏カナダのトロントにSを訪ねて、ほんのしばらくだったが、旧交を温めることが出来た。髪に白い物が混じり少し太ったのを除けば昔のままであった。

彼の親は第二次世界大戦中、中国からマレーシアに逃れてきた。中国系マレーシア人のSがマレーシアのペナンに四十年近く住み、その後ブルネイに移住し、最後にカナダのトロントに落ち着くまでの人生は、移民がそれほど特別なことでない中国系の人々にあつては多くの物語のひとつに過ぎないかも知れないが、島国に生まれそこで死ぬことが普通の我々には彼の人生は波瀾万丈の生き方に見える。

私が初めて国際学会で研究発表したのが一九八二年。それはマレーシアのペナンであった。Sはその数ヶ月前にIAEA（国際原子力機関）の教育プログラムで日本に来ていた。私がペナンに行くことを知った恩師から、ちょうどそのとき先生のもとに勉強に来ていた彼を紹介してもらったのが知り合った最初であった。

ペナンでの一週間はSのおかげで楽しく過ごせた。ペナンに着いた日、大雨であった。

乗せてもらった車のドアを開けると水が車内に流れ込んだ。私は外に出てエンジンの止まった車を押した。当時私には「マレーシア＝南の発展途上国」という図式ができあがっていたので、足を水に浸けて押しているとき、蛇か何かに噛まれたりしないかと訊いた。Sは笑って何ともないと言った。

当時マレーシアはマハティール首相のルックイースト政策（日本に見習え）で経済活動を活発に展開している時期であった。マレーシアはマレーシア人六割、中国人三割、インド人一割の人口比率であるが、*シブミプットラー*とよばれるマレーシア人を優先する政府の方針で、社会的な活動の枠組みがマレーシア人に有利になるように作られていて優秀な中国人には評判が悪かった。

彼もその例に漏れず努力しても報われることが少なく、どこかに移住したいとそのときから言っていた。

マレーシアからブルネイに移ったとメールが届いたのは会ってから十年以上経ってからである。

ブルネイと聞いてもアジアのどこかの国ぐらいの知識しかなかった。地図を広げて位

置を調べる。ボルネオ島の左上に豆粒ほどの大きさで南シナ海に面した国があった。王国、石油で潤っていて国民は所得税を払わなくてもいい、そんな事が分かった。

一九九七年、マレーシアのクワランプール（KL）でもう一人の古い友人に会い、その足でブルネイの首都、バンダル・スリ・フガワナの空港に降りた。インドネシアの山林火災でKLの空は終日どんよりと曇っていたが、その煙がブルネイにも流れていた。空港まで迎えに来てくれたSは森林火災はインドネシア政府の無策の故だと怒っていた。

Sは途中舗装が途切れる丘の上の豪邸に住んでいた。メイドさんがいた。結婚して子供が二人、男の子と女の子がいた。彼も奥さんもブルネイの大学で教えているという。泊めてもらった家には七つの部屋があり、そのうち六つにそれぞれシャワーがあった。経済的には言うことなしのブルネイの生活を捨てて彼は五年後カナダのトロントに移った。

（二〇〇七年十一月十七日）